

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

サラワク州政治エリートの中長期的変化とマレーシア政治への影響

森下明子

はじめに

マレー半島部で野党が躍進した2008年の総選挙以降、マレーシア政治におけるサラワク州とサバ州の重要性はこれまでになく高まった。与党連合の国民戦線（BN）がサラワク州とサバ州で得られるBN議席なしに連邦下院議席の過半数を確保できなくなったためである。サラワク州とサバ州がBNの「堅固な票田（fixed deposit<sup>1</sup>）」と呼ばれるようになった所以である。しかし、サラワク州とサバ州は本当にBNの堅固な票田なのだろうか。今後もこの2州は、連邦下院選挙においてBNの議席過半数確保に貢献するといえるのだろうか。

そこで本稿ではサラワク州に焦点を当て、過去およそ50年間の州議会選挙の当選者を分析し、サラワク州における与野党の中長期的変化を明らかにする。そしてそこから、連邦下院選挙を含む今後の連邦・州関係におけるサラワク州の動向を考察する。州議会議員に注目する理由は、サラワク州では州議会議員が連邦下院選挙における集票力の要であり、彼・彼女らが下院議員候補者のために有権者の票集めに尽力するからである。州議会議員たちは地元の顔役であり、特にBN構成党の場合は、広大な内陸部に散在する有権者との間にパトロン・クライアント関係を築いている。逆に言えば、党執行部が選定した下院議員候補者が、その選挙区の州議会議員の意にそぐわない人物である場合には、州議会議員たちは地元での集票を怠ることもできるのである。こうしたサラワク州の選挙政治の実態に鑑み、本稿では州議会議員に注目する。

本論に入る前に、サラワク州特有の政治的特徴について確認しておきたい。サラワク州の政治的特徴は、選挙日程、BN構成党、州首相の3点にある。

第一に、サラワク州の州議会選挙は他の12州と異なり、連邦下院選挙と異なる日程で開催される<sup>2</sup>。そのため、一般的にサラワク州議会選挙は次の連邦下院選挙のBN支持率

<sup>1</sup> “fixed deposit” は直訳すれば（BN票の）「定期預金」である。一般的にBNの堅固な票田を意味する。

<sup>2</sup> 半島部1州では1964年以来、サバ州では204年以来、連邦下院選挙と州議会選挙が同日開催されている（中村2016）。

を測る重要な指標と考えられている (中村 2016)。しかし、サラワク州議会選挙の結果は単純に連邦下院選挙の結果を予測するものとして捉えることはできない。その理由のひとつは、次に挙げる第二の政治的特徴に由来する。

サラワク州の第二の政治的特徴とは、サラワク州の BN が地方政党で構成されていることである。サラワク州には、半島部 11 州とサバ州の BN 構成党である統一マレー国民組織 (UMNO)、マレーシア華人協会 (MCA)、マレーシア・インド人会議 (MIC)、マレーシア人民運動党 (Gerakan) 等の支部が存在しない。サラワク州の BN 構成党は、2016 年 5 月の州議会選挙時点で、サラワク統一ブミプトラ保守党 (PBB)、サラワク統一人民党 (SUPP)、サラワク人民党 (PRS)、サラワク進歩民主党 (SPDP) の 4 党である<sup>3</sup>。2016 年の州議会選挙では、この 4 党に加えて無所属の BN 直接候補者 (BN Direct) が出馬した<sup>4</sup>。このことから、本稿では便宜上、サラワク州の BN を「サラワク BN」、半島部の BN を「半島部 BN」と称す<sup>5</sup>。なお「BN」とのみ述べる場合は、連邦下院における BN を指す。

第三の政治的特徴は、サラワク州では 1981 年から 2014 年まで州首相が交代せず、33 年の長期にわたってタイプ・マフムドが州首相としてサラワク政治の頂点に君臨したことである<sup>6</sup>。タイプ・マフムドは州首相在任中、州行政ポストの分配と天然資源開発の利権の分配を通して、州内に広く政治経済的パトロンクライアント・ネットワークを構築した。また、開発利権に絡んだファミリービジネスを展開し、サラワク州において多大な政治経済的影響力をもった<sup>7</sup>。しかし、タイプ・マフムドは 2014 年に州首相を辞任し、後任としてタイプ・マフムドの妹の元夫であるアデナン・サテムが州首相に就任した。さらに 2017 年 1 月 11 日にはアデナン・サテムが州首相在任中に死去したため、アバン・ジョハリ副州首相が新たに州首相に就任した。このように 2014 年以降になって州首相が次々と変わるなか、サラワク州の政治は今後どのように変化していくのだろうか。この点もまた本稿の関心事項である。

ただし本稿では、アデナン・サテム前州首相及びアバン・ジョハリ現州首相による政策やメディアでの発言、タイプ・マフムドの辞任後に初めて開催された 2016 年の州議会選

<sup>3</sup> サラワク州の BN 構成党の支持基盤や 2008 年の連邦下院選挙における結果については森下 (2008) を参照。

<sup>4</sup> 2016 年のサラワク州議会選挙に出馬した BN 直接候補者には、サラワク州の BN 構成党から離党した人々で結成された新党のメンバーが、一旦無所属となって出馬した例が含まれる。

<sup>5</sup> サバ州の BN 構成党は半島部の BN 構成党および地方政党からなる。本稿ではサバ州の BN については言及しないため、特に呼称を設けない。

<sup>6</sup> マレーシアの地方行政の基本構造は、州元首を戴き、行政権は州首相を長とする行政機関 (半島部では州執行理事会、サバ州では州内閣府、サラワク州では州政府評議会とよばれる) により行使される。州首相の選出過程は、州議会の中で最も議員の信任を得られると見込まれる議員 (通常、州議会でも最も多く議席を獲得した政党の代表) が州元首によって州首相に任命される。

<sup>7</sup> タイプ・マフムドおよびタイプ・マフムド州首相時代のサラワク政治と利権構造については、Leigh (1974), Brown (2001), Morishita (2009), Aeria (2016) などを参照。

挙に特化した選挙結果の分析など、個々の政治日程の詳細な分析は行わない<sup>8</sup>。本稿では、サラワク州の政治的变化を約 50 年の中長期的視点から捉え、そこからポスト・タイプ時代のサラワク政治において何が変わりつつあるのかを明らかにすることに主眼を置く。そのなかで冒頭に述べた問い、すなわち、サラワク州が今後も連邦下院選挙における BN の堅固な票田であり続けるのかについて考察する。

サラワク政治の変化を中長期的に捉えるために、筆者は州政治エリートに注目する。州政治エリートとは、サラワク州の政党幹部、州政府の閣僚、州議会議員、州選出の連邦下院議員等を指す。州政治エリートに注目する理由は、タイプ州首相時代およびその前後で州政界にどのような地殻変動が起きたのかを、まずは大掴みに把握するためである。本来は州政治エリート全体の分析が必要であるが、本稿では州議会議員に焦点を当てる。その理由はすでに述べた通り、州議会議員が連邦下院議員よりも有権者の投票行動に影響力をもつからであるが、これに加えて、州議会議員が政党幹部と州政府閣僚を含む州政治エリートの母集団であることも重要である。筆者は 1969 年の第 1 回州議会選挙から 2016 年の第 11 回州議会選挙までの全当選者について、インターネット上およびマレーシア選挙委員会発行の州議会選挙結果に関する資料を用いて、選挙区、氏名、政党、サラワク BN か否かの 4 項目についてデータベースを作成した<sup>9</sup>。本稿ではこのデータベースを用いて分析した結果を、以下に大きく分けて 3 つ指摘したい。

## I 州議会選挙当選者にみるサラワク政治の変化 (1) ——野党の変化

1969 年から 2016 年までのサラワク州議会選挙の当選者データをみると、まず浮かび上がってくるのは、野党にみられる 2 つの変化である。

ひとつは 1996 年の州議会選挙を境に、主要な野党が地方政党から全国政党に移ったことである。1996 年までの主要な野党は、一般にダヤクと総称される非ムスリム・ブミブトラと華人の一部を支持基盤とするサラワク国民党 (SNAP) と、SNAP からの離党者を中心に結成されたサラワク・ダヤク民族党 (PBDS) であった。これらの政党は主に内陸部の選挙区を牙城としていた。しかし、両党はいずれも 1996 年の州議会選挙までにサラワク BN に加入し、それ以降、主要な地方政党は全てサラワク BN の構成党となった<sup>10</sup>。

<sup>8</sup> 2016 年の州議会選挙については中村 (2016) の分析が詳しい。

<sup>9</sup> 本データベースは以下の URL にて公開している。  
[http://researchmap.jp/mulixkpln-209713/#\\_2209713](http://researchmap.jp/mulixkpln-209713/#_2209713)

<sup>10</sup> SNAP は 1976 年から 204 年までサラワク BN への加入と脱退を繰り返し、2004 年以降は野党となった。しかし党幹部間の争いの末に 2013 年に解党した。PBDS は 1983 年の州議会選挙後にサラワク BN に加入し、その後脱退、1996 年に再び加入した。しかし最終的には党幹部争いの末に 2004 年に解党した。現在のサラワク BN 構成党の一つである PRS は、PBDS を前身とする。

他方、1996年の州議会選挙以降、都市部の華人が多い選挙区では全国規模の野党である民主行動党(DAP)に票が集まるようになった。その背景には、1990年代半ば頃からタイブ・マフムド州首相(当時)のファミリービジネスに対する不満が都市部で高まったこと、そして、華人を支持基盤とするSUPP内部で幹部間争いが生じたことにあるといわれている<sup>11</sup>。さらに2006年の州議会選挙以降は、DAPと同じく全国規模の野党である人民公正党(PKR)にも徐々に票が集まるようになった(表1参照)。

しかし、DAPやPKRの議席はほぼ都市部の選挙区に限られている。内陸部の場合、後述する第二の野党の特徴にも関係するが、1996年の州議会選挙までに、それまで野党であった地方政党が全てサラワクBNに加入したため、それまでの野党票の多くがサラワクBNに流れた。これに加えて、サラワクBNは投票の見返りに住民に生活資金の提供や集落のインフラ整備などを行い、有権者との間にパトロン・クライアント関係を築いた。そのため今日のサラワク州内陸部において比較的野党票が多い地域は限られており、たとえば州政府による開発事業によって住民の生活が脅かされ、野党の活動家から支援を

表1. サラワク州議会選挙における主要与野党\*の構成(1969-2016年)

\*議席を獲得した政党のみ記載。

選挙年	与党連合の構成党	野党
1969	与党連合Alliance: サラワク・ブミプトラ党(BUMIPUTERA) サラワク華人協会(SCA)	SNAP SUPP(選挙後にAlliance加入) サラワク・ブサカ党(Pesaka)
1974	与党連合サラワクBN(以下同): PBB, SUPP	SNAP
1979	PBB, SUPP, SNAP	なし
1983	PBB, SUPP	SNAP(選挙後にサラワクBN加入) PBDS(選挙後にサラワクBN加入)
1987	PBB, SUPP, SNAP	PBDS サラワク・マレーシア人民協会(PERMAS)
1991	PBB, SUPP, SNAP	PBDS
1996	PBB, SUPP, SNAP, PBDS	DAP
2001	PBB, SUPP, SNAP, PBDS	DAP
2006	PBB, SUPP, SPDP(SNAPの分派) PRS(PBDSの後身)	DAP, SNAP, PKR
2011	PBB, SUPP, SPDP, PRS	DAP, PKR
2016	PBB, SUPP, SPDP, PRS	DAP, PKR

出所: サラワク州議会選挙当選者データベースより筆者作成

<sup>11</sup> サラワク政治に詳しい地元ジャーナリストへの電話インタビューによる(2017年1月7日)。

受けている地域や、候補者争いに敗北した地元のサラワク BN 政治家が選挙区の住民に敢えて野党に投票するように指示した地域などに限られる。こうした地域が含まれる選挙区では野党が州議会議席を獲得する場合もある<sup>12</sup>。一方、都市部の場合、サラワク BN に所属する州議会議員と有権者の間には、多くの場合パトロン・クライアント関係がない。また、都市部では内陸部よりもインターネットへのアクセスが容易であるため、有権者は新聞やテレビでは報道されないタイプ・マフムドのファミリービジネス問題やサラワク BN 政治家の汚職、全国規模の野党による連邦政府批判、マレーシア政治全体の動向等を知ることができる。こうした社会政治的環境の違いやアクセスできる情報量の違いが、1990年代半ば以降の野党票の地理的分布にも反映されていると考えられる。

サラワク州の野党のもうひとつの特徴は、特定の選挙区で二期以上再選している州議会議員が政党あるいは与野党間を移動していることである。これは1996年の州議会選挙以前に多く見られた特徴であり、内陸部の選挙区に集中している<sup>13</sup>。たとえばゲマ区 (Ngemah)、パカン区 (Pakan)、マルディ区 (Marudi)、テラン・ウサン区 (Telang Usan) などでは、たとえ同じ候補者が再選していたとしても、当選者の所属する政党が前回と異なっていたり、あるいは、政党は同じでも政党の立ち位置が野党から与党に変わっていたりする場合が見られる。こうした特徴の背景には、前述した1996年の州議会選挙を境とする野党構成の変化が影響している。政党あるいは与野党を移動した議員は、1996年以前の主要野党 (SNAP、PBDS) のメンバーであり、政党の分裂・解党等によって政党を移籍し、移籍後の州議会選挙では移籍先の政党から出馬し当選した人々である。また、政党そのものが野党から与党に鞍替えしたことが反映されている場合もある。

このことはすなわち、サラワク州内陸部の一部選挙区では、有権者の投票行動を規定する要因が政党ではなく、候補者にあることを示すと考えられる。こうした選挙区では、与野党の勝敗は有権者によって決まるのではなく、地元で支持率が高く再選が確実な候補者がどの政党から出馬するのか、あるいは、候補者の所属政党の党首が与野党どちらにつくことを選ぶのかによって決まるといえるだろう。言い換えれば、当該選挙区では有権者ではなく州政治エリートの判断によって与野党の勝敗が決まると考えられる。

以上のサラワク州における野党の変化に関する2つの特徴は、サラワク政治および連邦・州関係を分析する上でどのような意味をもつのだろうか。まず、第一に挙げた1996年を境にした野党構成の変化からは、1990年代半ば以降、選挙における対立構造が「地方政党 (与党) vs 地方政党 (野党)」から「地方政党 (与党) vs 全国政党 (野

<sup>12</sup> たとえば2011年と2016年の州議会選挙では、内陸部のバクララン区 (Ba' kelalan) でバル・ビエン (PKR サラワク支部長) が当選した。バル・ビエンは弁護士であり、開発事業をめぐる内陸部での土地争議や土地権問題について住民側の弁護士として活動してきた人物である。

<sup>13</sup> 1996年以降の州議会選挙では、無所属の州議会議員が次の選挙でサラワク BN の構成党から出馬し当選した例が2件みられるのみである。



党)<sup>14</sup>」という構図に変化したことがわかる。そしてこのことは、サラワク BN が 1990 年代半ば以降に直面した政治的限界を示している。サラワク州の主要な野党が地方政党であった時代には、サラワク BN が野党勢力を取り込むことは比較的容易であった。しかし、主要な野党が全国政党になったことで、サラワク BN が野党を取り込むことは極めて難しくなった。なぜなら、半島部にある野党の中央執行部がサラワク州の与野党関係をめぐる新たなステークホルダーとなったからである。サラワク BN は、半島部における半島部 BN と野党の関係を考慮した上で、州内での野党対策を講じなければならなくなった。しかし、その方策はおそらくまだ見つかっていない。また、仮にサラワク BN が DAP や PKR の州支部を取り込むことができたとしても、今度は半島部 BN や、DAP および PKR の中央執行部との折衝が必要となる。そうなれば、連邦・州関係だけでなく連邦政治にも大きな影響を与えることになるだろう。

サラワク州の野党の第二の特徴（二期以上の当選者の政党・与野党間移動）からは、サラワク州に二つのタイプの選挙区があることがみえてくる。一つは有権者の投票行動が政党によって規定される選挙区であり、もう一つは有権者の投票行動が候補者によって規定される選挙区である。後者の選挙区は内陸部に見られ、次の連邦下院選挙におけるサラワク BN の動向をうかがう上で注目すべき選挙区であると考えられる。その背景には、1963 年のマレーシア連邦成立以降、連邦政府とサラワク州政府の間で常に争点となっている「自治の問題」がある。詳細は後述するが、サラワク BN は連邦下院選挙において、自治をめぐる駆け引き材料として候補者重視の選挙区を利用するかもしれない。当該選挙区では、当選可能性の高い候補者を「サラワク BN ではあるが、連邦下院においては非 BN 候補者である」として出馬させ、当選させることが可能だからである<sup>15</sup>。そうなれば連邦下院選挙において BN は議席数を落とすことになる。

ここで「自治の問題」について触れておきたい。1963 年のマレーシア連邦成立に先立ち、サラワクはマレーシア連邦下における 18 の自治権（宗教、言語、入州管理、教育な

<sup>14</sup> ここでいう全国政党とは、半島部に中央執行部が置かれ、全国に支部をもつ政党を意味する。しかし中央執行部が州支部の運営に関して絶対的な決定権を持つわけではない。DAP と PKR のサラワク州支部は独自財源で運営しており、出馬する選挙区や候補者の選定等でも州支部の意向が反映される。サラワク州に DAP や PKR の支部が設立された背景には、党中央執行部がサラワク BN に批判的な地元活動家に支部設立を働きかけたという経緯があったと考えられるが、反サラワク BN 活動家の立場で考えると、サラワク州で地方政党を設立するには人的・資金的リソースに限界があったとも考えられる。

<sup>15</sup> そもそもサラワク BN を構成する地方政党は、連邦下院選挙において必ずしも連邦下院の BN に参加する必要はない。しかし、サラワク BN の戦略として、サラワク BN の全ての構成党が連邦下院の BN に参加しないという選択肢は基本的にあり得ない。なぜなら半島部 BN の幹部たちがサラワク BN 構成党の幹部たちに直接働きかけて BN に入るように促す可能性があるだろうし、また、かつてのサバ州のように半島部の BN 構成党がサラワク州に支部をつくる機会を与えかねないからである。サバ州に UMNO の支部がつけられた経緯については Chin (1999) を参照。

ど)に関する覚書を取り交わしており、サラワク州政府はこの覚書に基づいて、これまで連邦政府に自治権の拡大と保障を求めてきた<sup>16</sup>。一般にサラワク州では、連邦政府の政策は半島部マレー人を優遇する政策として捉えられており、たとえば石油政策やブミプトラ政策などはサラワク州の石油資源、宗教、教育、公務員人事等への自治権を侵害するものとして受け止められている。今日のサラワク社会では、こうした考え方が州政治エリート間だけでなく州民の間にも広がっており、マレーシア連邦成立時に約束されたはずの18の自治権の全面的付与を連邦政府に求める声が強まっている。2010年代半ば頃からは、「サラワク人のためのサラワク (Sarawak 4 Sarawakians, S4S)」と名乗る市民グループが街頭デモを行うようになり、その規模は年々拡大している<sup>17</sup>。

こうした状況のなか、2016年のサラワク州議会選挙では、サラワク BN の応援に駆けつけたナジブ首相が、サラワク州の自治権の拡大に関して今後も連邦政府と州政府で話し合いを続けると発言した (*Channel News Asia*, 7 May, 2016)。このナジブ首相の発言を受けて、サラワク BN は、ナジブ首相が次の連邦下院選挙が開催されるまでの間に自らの発言を実行するかどうかを注意深く観察している。もしサラワク州の自治に関して進展がなかった場合、サラワク BN は次の連邦下院選挙において半島部 BN に全面的に協力しないということもあり得る。ナジブ首相は、サラワク BN がそうした戦略に出ないように、サラワク州首相に対して様々な政治的駆け引きを行うと考えられる。

## II 州議会選挙当選者に見るサラワク政治の変化 (2) 絶え間ない「新陳代謝」

サラワク州議会選挙の当選者データから浮かび上がる第二の特徴は、州政治エリートの

<sup>16</sup> 現在のマレーシアは、1957年にイギリスから独立したマラヤ連邦が、1963年にシンガポール、イギリス領北ボルネオ（現サバ州）、イギリス領サラワク（現サラワク州）と統合して成立した。なお、シンガポールは1965年にマレーシアから独立した。

<sup>17</sup> S4Sの設立者は、海外のNGOや活動家と組んでタイプ・マフムド元州首相の汚職問題を糾弾する地元の活動家たちである。リーダーのピーター・ジョン・ジャバンはイバン人で、ラジオ・フリー・サラワクのDJである。ラジオ・フリー・サラワクは、タイプ・マフムドなどサラワク BN 政治家の汚職に関する情報を伝える短波放送のラジオ局である。S4S自体は野党よりの団体であるが、そのスローガンは与野党を超えてサラワク州民に広がりつつある。S4Sの活動については以下のオンライン記事などを参照。

“S4S rally outside Sarawak assembly for autonomy,” *Free Malaysia Today*. 21 November, 2016.

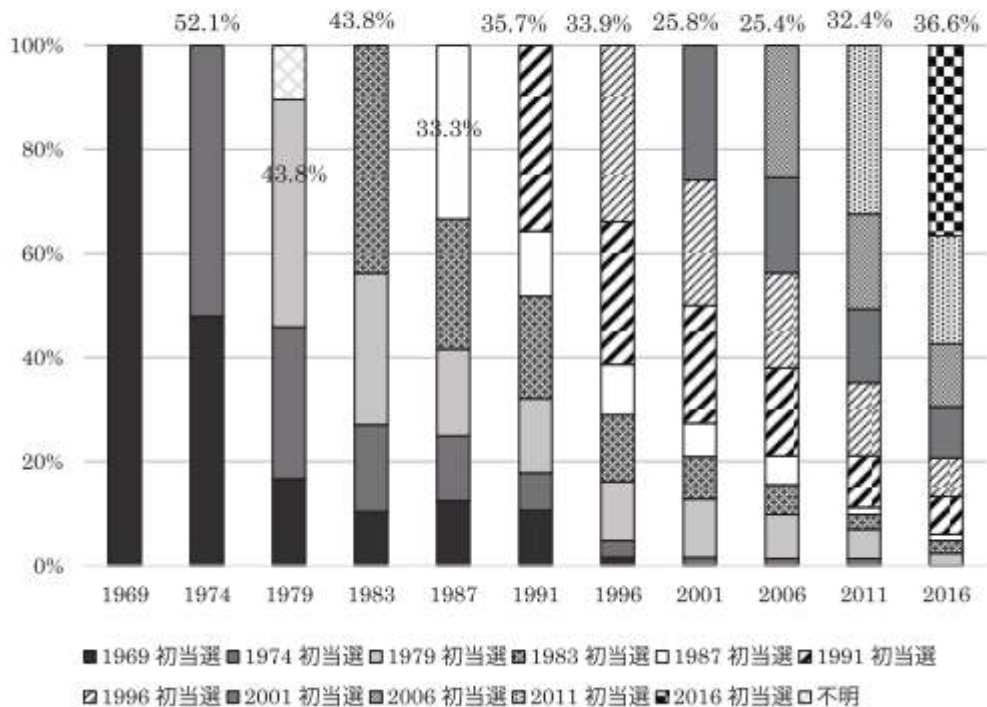
<http://www.freemalysiatoday.com/category/natin/2016/11/21/s4s-holds-rally-opposite-state-assembly-calls-for-sarawak-motion-to-be-tabled/> (2017年2月4日最終アクセス)

“S4S: Sarawak should control its own resources,” *Free Malaysia Today*. 6 December, 2016. <http://www.freemalysiatoday.com/category/natin/2016/12/06/s4s-arawak-should-control-its-own-resources/> (2017年2月4日最終アクセス)

絶え間ない「新陳代謝」である。サラワク州では、州議会選挙のたびに新人候補者が一定割合で当選しており、少ないときでも当選者の25.4%（2006年州議会選挙）、多いときには当選者の52.1%（1974年州議会選挙）を初当選者が占めている（グラフ1.参照）。また、初当選者数をみると、過去11回の州議会選挙のうち2016年の州議会選挙の初当選者数が最も多い（30人）。なお、初当選者の人数や割合は野党の獲得議席数に比例しているわけではない。サラワクBNの最大与党であるPBBにおいても「新陳代謝」は起きている。PBBに所属する当選者のうち初当選者が占める割合は、少ないときで2.9%（2006年州議会選挙）であるが、多いときでは56.3%（1979年州議会選挙）に上る。なお、2016年の州議会選挙ではPBBに所属する当選者のうち33.3%が初当選者であった（グラフ2.参照）。

さて、こうした州議会議員の絶え間ない「新陳代謝」は、サラワク政治および連邦・州関係においてどのような意味をもつのだろうか。この問いを検討するには、初当選者の顔ぶれや候補者の選定理由などについて、さらなる調査・分析が必要である。現時点で一つ考えられることは、サラワクBNに所属する州議会議員の新陳代謝が盛んになればなるほど、DAPやPKRに所属する州議会議員のなかから、サラワクBNの所属議員よりも

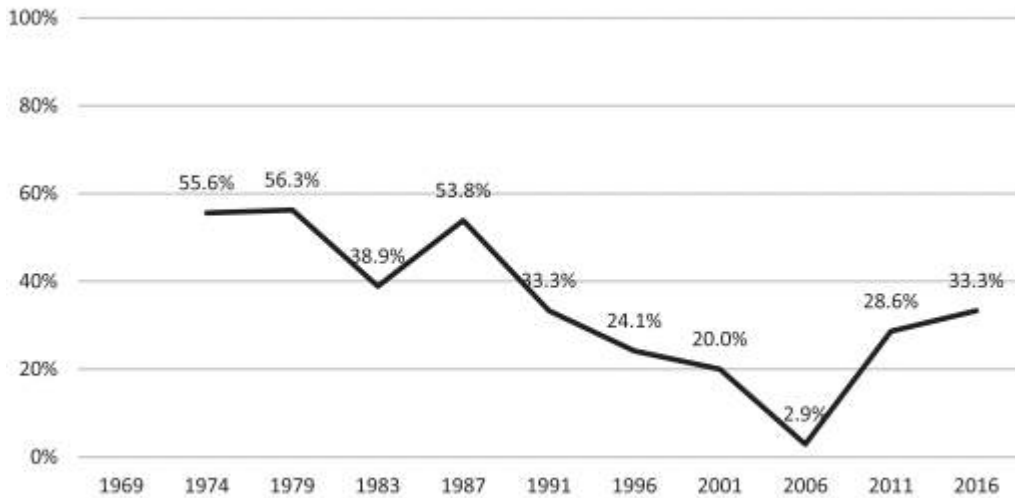
グラフ1. サラワク州議会選挙の当選者における初当選年の分布と初当選者の割合  
(選挙年別) (1969-2016)



出所：サラワク州議会選挙当選者データベースより筆者作成



グラフ 2. PBB に所属する当選者における初当選者の割合 (1969-2016)



出所：サラワク州議会選挙当選者データベースより筆者作成

議員歴の長い議員が出てくる可能性がある、ということである。将来的にはサラワク BN と DAP および PKR の州議会議員の議員歴の平均値が逆転するかもしれない。そのときには州議会の審議過程において DAP 議員や PKR 議員がサラワク BN 議員よりも政治的経験と手腕に長け、たとえ DAP や PKR が野党であったとしても、彼らの提案事項や意見が州議会を通る可能性が出てくるのかもしれない。

### Ⅲ 州議会選挙当選者にみるサラワク政治の変化 (3)

#### ・ 州政治指導者と州政治エリートの州議会議員歴の乖離

さて、前節ではサラワク州の州議会議員にみられる「新陳代謝」を明らかにしたが、その一方で、サラワク州の政治指導者たち（州首相、州政府閣僚、サラワク BN 構成党の幹部等）の多くは古参の州政治エリートたちである。例えば、故アデナン・サテム前州首相（前 PBB 党首）は 1979 年の州議会選挙で初当選し、以後再選を繰り返してきた。またアバン・ジョハリ州首相（PBB 党首）およびジェームズ・マシン副州首相（PRS 党首）は、1983 年の州議会選挙に初当選して以来の州議会議員であり、次期州首相候補ともいわれるアワン・トゥング第二資源管理・環境大臣（PBB 上級副党首）は 1987 年の州議会選挙に初当選して以来の州議会議員である。

こうしたサラワク州の政治指導者層の州議会議員歴（政治的経験値と言い換えてもよいかもしれない）と、彼らが率いる州議会議員の議員歴は年々乖離していく傾向にある。直近の 2016 年の州議会選挙の当選者をみてみると、現在の政治指導者層を構成する古参議員の割合は極めて少ない<sup>18</sup>。具体的にみていくと、2016 年時点で 1969 年の第一回州議会

選挙あるいは1974年の第二回州議会選挙で初当選して以来の州議会議員は1人もいない。1979年の州議会選挙に初当選して以来の議員は2人（故アデナン・サテム前州首相、アンブロス・ブリカウPBB州議会議員）、1983年以降の議員は2人（アバン・ジョハリ州首相、ジェームズ・マシ副州首相）、1987年以降の議員は1人（アワン・トゥンガPBB上級副党首）だけである。これに対して、1991年以降の州議会選挙で初当選して以来の議員は77人いる（当選者の93. %）。前述のとおり、2016年の州議会選挙の初当選者数は過去最大であり（30人）、今後の州議会選挙でも当選者の一定数が初当選者であると考えれば、サラワク州における政治指導者層とそれ以外の州議会議員の政治的経験値のギャップは今後ますます拡大すると考えられる。

このことは、現在のサラワク州の政治指導者たちが引退した後、次の指導者層がどのような特徴や傾向をもつ人々になるのか、ということに影響を与えると考えられる。現時点で予測することは困難であるが、注目すべきはサラワクの自治をめぐる問題と政党関係だろう。

第一の注目点は、前節で述べた連邦政府とサラワク州政府の間の「自治の問題」をめぐる今後の政治的駆け引きである。次のサラワク州の政治指導者たちが連邦政府に対して自治権をどの程度求めるのか、また、交渉においてどのような戦略・方法をとるのが注目される。これまでのサラワク州の政治指導者たちは、1963年にマレーシア連邦が成立した当時の記憶をある程度実体験としてもち、また、現在の連邦政府の政治指導者たちよりも政治経験が長いと、政治的交渉に長けている。たとえば、ナジブ首相の政界入りは1976年であるのに対して、タイプ・マフムド元州首相は1962年から政党活動を始め、1963年にはサラワク州政府のコミュニケーション・労働大臣に就任した。また、アバン・ジョハリ現州首相は1977年にはすでに州政府の産業・インフラ大臣に就任している<sup>19</sup>。

しかし、こうした古参の州政治エリートがサラワク州政界から引退すれば、次の担い手となるのはおそらく現在の州議会議員の中堅グループである<sup>20</sup>。彼らは現時点で議員経験をそれなりに積んでいるが、現在州政府の閣僚ポストに就いているのはわずか4人である<sup>21</sup>。他方で、彼らの交渉相手となる連邦政府の政治指導者たちは、今後大きな政治変動や政界

<sup>18</sup> 本稿では、便宜上、州議会議員の古参グループを1987年以前の州議会選挙で初当選して以来の州議会議員とする。2016年時点での州議会議員歴は29年以上ということになる。

<sup>19</sup> ナジブ首相は1953年生まれであり、1976年の連邦下院選挙では23歳の若さで初当選を果たした。初入閣は1978年であり、連邦政府のエネルギー・通信・郵政副大臣に任命された。

<sup>20</sup> 本稿では、中堅グループを便宜上191年から2006年までの州議会選挙で初当選し、現在まで州議会議員に再選し続けている人々とする。2016年現在の彼・彼女らの州議会議員歴は10-25年ということになる。

<sup>21</sup> 2017年1月時点のサラワク州政府閣僚9人のうち州議会議員の中堅グループは、ウォン・スーンコー第二財務大臣（BN Direct, 元 SUPP, 華人, 男性）、マイケル・マニン青年・スポーツ・団結大臣（PBB, 非ムスリム・ブミプトラ, 男性）、ステフェン・ルンディ公共施設大臣（PBB, 非ムスリム・ブミプトラ, 男性）、ファティマ・アブドゥラ福祉・女性・コミュニティ大臣（PBB, ムスリム・ブミプトラ, 女性）の4人である。

再編が起きない限り、おそらく現在の連邦政府大臣や UMNO 中央執行部幹部、UMNO 州支部幹部などで構成されることになるだろう。彼らは現在のサラワク州議会議員の中堅グループよりもおそらく政治経験を豊富に持ち、政治的交渉にも長けた人々であると予想される。そうした連邦政府の政治指導者たちに対して、次のサラワク州政治指導者たちは一体どのように自治権拡大の交渉を進めるのか。彼らはサラワク州の「自治の問題」をどのようにとらえ、どのような戦略を立てるのか。今後のサラワク政治を分析する上で注目すべき点であると考えられる。

第二の注目点は、サラワク BN 内の政党関係や各政党内のパワーバランス、与野党間関係である。これらが次の世代の政治指導者の下でどのように変化するのか。特に注目すべきはサラワク BN の最大与党である PBB である。本来 PBB には様々なレベルの派閥が存在するが<sup>22</sup>、これまではタイプ・マフムド元州首相による強いリーダーシップと各派閥に対する巧みな政治的采配によって党内の統一が維持されていた。タイプ・マフムドは現在も PBB に対して影響力を持つが、すでに 80 歳を迎えた彼の政治的影響力が今後も長く続くとは考え難い。では、将来タイプ・マフムドが実質的に政界から去った後、誰が PBB の指導者になるのか、その人物はどの派閥から出て来るのか、新たな PBB 指導者は党内人事や選挙時の候補者選定、州閣僚人事等においてどのような采配を振るのか、それによって PBB 内のパワーバランスはどう変化するのか。もし特定の派閥が優遇されることになれば、PBB が分裂する可能性もある。そうなればサラワク BN の構成党が変化する可能性があり、また、政党のもつ集票力も変わるだろう。もはやサラワク州が BN の堅固な票田であり続けるかどうかは予測できない。

#### IV 結びにかえて マレーシア政治研究における意味

本稿で述べたサラワク州議会議員に関する分析は、マレーシア政治研究の文脈においてどのような意味を持つのか。最後に 3 つ整理しておきたい。

一つは選挙動向との関係である。具体的に言えば、今後の連邦下院選挙におけるサラワク BN の貢献度ということになる。次の連邦下院選挙でのサラワク BN の貢献度については、2016 年のサラワク州議会選挙でのナジブ首相による「自治権の拡大に関する話し

<sup>22</sup> PBB の派閥には、1973 年の政党設立以前の前身政党 (Pesaka, Bumiputra) による派閥、エスニック集団レベルでの派閥 (マレー、ムラナウ、イバン、ピダユ、クラビット・カヤン・ケニヤなど)、マレー人どうしの出身地レベルでの派閥 (クチン周辺、北部、中部) や政治的志向の違いによる派閥 (連邦政府支持派、サラワク州政府支持派)、イバン人どうしのリーダーごとの派閥などがある。なお、マレー人の出身地別派閥は異なる指導者を支持する傾向をもち、クチン周辺のマレー人はマレー人のアバン・ジョハリ現州首相の支持派、北部と中部出身のマレー人はアワン・トゥンガやタイプ・マフムドなどムラナウ人指導者の支持派といわれる。サラワク州政治に詳しい地元ジャーナリストへの電話インタビューによる (2017 年 1 月 21 日)。

合いの継続」という発言に対する連邦政府の対応次第であると考えられる。今後アバン・ジョハリ州首相とナジブ首相がどのような駆け引きを行うのかに注目したい。また、他にも連邦政府の施策や発言の中にサラワク州の政治行政にマイナスに作用し得る事柄があれば、サラワク BN は候補者重視の選挙区を利用して BN の議席数をコントロールするかもしれない。

より中長期的な選挙動向については、タイプ・マフムドが政界を去った後の PBB 指導者が誰になるのかによって左右されると考えられる。今後の PBB の党内政治次第でサラワク BN には大幅な再編が起きる可能性があり、再編によってサラワク BN の集票力が弱まることもあり得る。そうなればサラワク州が今後も BN の堅固な票田であり続ける保証はないだろう。

第二に、サラワク州の次の世代の政治指導者が「自治の問題」にどう対応するのかという問題があり、これが将来のマレーシア連邦の政治的安定に影響を与える可能性がある。今日のサラワク州の経済的状況は、マレーシア連邦が成立した 1963 年当時とは全く異なる。かつてのサラワク州はほぼ未開発の熱帯雨林地帯であったが、現在では天然資源開発が進み、また、今後のさらなる産業発展に必要な技術や大資本を持つ地元企業がある。また、サラワク州は半島部とは異なる独自の社会、文化、歴史を持つ。すでに述べたように、今日のサラワク州では自治権の保障を求める動きが社会的にも広まりつつある。そうした声が今後サラワク社会にさらに広がり、サラワク BN のなかにも急進的な自治権保障の運動を支持する政治家が増えてくれば、サラワク州の政治指導者たちは連邦政府との交渉において、これまでのような政府間の政治的駆け引きではなく、住民動員を伴う急進的戦略をとることもあり得るかもしれない。

最後に、サラワク州の州議会議員にみられる絶え間ない新陳代謝は、今後のマレーシアにおける政治家と企業、あるいは政治家と選挙区民の間のパトロン・クライアント関係に関する議論に新たな視点をもたらすかもしれない。サラワク州に限らず、州議会議員の新陳代謝はおそらくどの州においても起きていると考えられる。新たに州政界入りした州議会議員たちは、過去の州議会議員が築いた地元企業や選挙区の住民とのパトロン・クライアント関係にどのように組み込まれていくのか。あるいは、全く新しいパトロン・クライアント関係を構築するのか。また今後は与党議員を凌ぐ州議会議員歴をもつ野党議員が現れる可能性があり、そうなれば野党議員と有権者の間にも何らかのパトロン・クライアント関係が構築されるかもしれない。パトロン・クライアント関係の多様化は、今後のマレーシア政治研究における新たな分析課題になる可能性がある。こうした中長期的な今後の政治的变化を探る上でも、サラワク州政治の動向は、マレーシア半島部の政治家やマレーシア政治研究者にとって、これまで以上に見逃せないものになるだろう。

## 〈参考文献〉

### 日本語文献

- 森下明子 (2008) 「なぜサラワクとサバではBNが「圧勝」したのか」山本博之編『日本マレーシア研究会 Discussion Paper1 「民族の政治」は終わったのか?—2008年マレーシア総選挙の現地報告と分析』日本マレーシア研究会、135-140頁。
- 中村正志 (2016) 「マレーシア：第11回サラワク州議会選挙の結果と政局への影響」ジェトロ・アジア経済研究所 (2016年1月6日最終アクセス、[http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Region/Asia/Radar/pdf/201605\\_nakamura.pdf](http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Region/Asia/Radar/pdf/201605_nakamura.pdf) よりダウンロード)

### 英語文献

- Aeria, Andrew (2016) "Economic Development via Dam Building: The Role of the State Government in the Sarawak Corridor of Renewable Energy and the Impact on Environment and Local Communities," *Southeast Asian Studies*, Vol. 5. No. 3: 373-412.
- Brown, David Walter (2001) "Why Governments Fail to Capture Economic Rent: The Unofficial Appropriation of Rain Forest Rent by Rulers in Insular Southeast Asia Between 1970 and 1999," Ph. D. Dissertation. University of Washington.
- Chin, James (1999) "Going East: UMNO's entry into Sabah Politics," *Asian Journal of Political Science*, Vol. 7. No. 1: 20-40.
- Harding, Andrew J. and Chin, James. eds. (2015) *50 Years of Malaysia: Federalism Revisited*. Marshall Cavendish International (Asia) Pte Ltd.
- Leigh, Michael. B. (1974) *The Rising Moon: Political Change in Sarawak*. Sydney University Press.
- Morishita, Akiko. 2009. "Politics and Timber in Malaysia," *Asian Transformations in Action: The Work of the 2006/2007 API Fellows*. The Nippon Foundation, pp. 1-6.

### 新聞記事

- "Pressure mounts on federal govt as Sarawak calls for greater autonomy," *Channel News Asia*. 7 May, 2016.
- "S4S rally outside Sarawak assembly for autonomy," *Free Malaysia Today*. 21 November, 2016. <http://www.freemalaysiatoday.com/category/nation/2016/11/21/s4s-holds-rally-opposite-state-assembly-calls-for-sarawak-motion-to-be-tabled/> (2017年2月4日最終アクセス)
- "S4S: Sarawak should control its own resources," *Free Malaysia Today*. 6 December, 2016. <http://www.freemalaysiatoday.com/category/nation/2016/12/06/s4s-sarawak-should-control-its-own-resources/> (2017年2月4日最終アクセス)